

やなぎやま・つとむ／秋田スリパチ学会会長。本業は編集者・ライター。1990年、早稲田大学第一文学部卒業の後、株式会社新潮社に入社。2016年独立。2017年に秋田へ帰郷。形に着目することで街の面白さを発見する「スリパチ学会」を主催。2019年にNHK『ブラタモリ』秋田篇で総合案内人を務める。秋田魁新報にて「気ままに凸凹街歩き」連載中（毎月最終日曜掲載）。



スリパチ学会とブラタモリ

編集者・ライター 柳山 努 (昭和61卒)



取材中の一枚。本編では採り上げられませんが、秋田大学の林信太郎先生と一緒に「千屋断層」を案内しているところです。



ロケは朝5時から始まりました。現地には前泊して撮影に臨んだ湯沢の「こまち娘」さんが待機していました。

まして、同番組が全国を取り上げるようになってから、各地のスリパチ学会も取材のお手伝いをしていきます。冒頭の「ブラタモリ」が秋田を取り上げるか

ら、秋田スリパチ学会として協力してね」というニュアンスでした。実は同番組、放送日が告知されるまで、一切情報を明かしてはならない、というお約束があり、取材先の方々にも、ロケ直前までは番組名やタモリさんのお名前も口にするのができないんです。冒頭の持つて回ったやりとりは、その「お約束」ゆえのことでした。取材期間は6月から8月までの3ヶ月。ほぼ毎週、4、5泊ペースで秋田に滞在する番組スタッフに同行し、県内各地を走り回りました。彼らの取材力は大変なもので、私が何気なく提案した取材地候補についても、数日のうちに、地元の人間ですら知らないような事柄まで含めて調べ上げ、番組で紹介すべきかどうかの検討が行われていました。二日半にわたる入念なりハールサル（スタッフが多タモリさん役とアナウンサー役を演じました）に続いて本番が行われたのは9月初旬。タモリさんの博覧強記ぶりによる「案内人泣かせ」にドギマギしながらも、なんとか無事収録を終えました。カメラが回っていない時でも、「見事な海岸段丘だねえ!」「目濁、観たかったんだよ」などと話しかけてくれたタモリさんの、「地形ラブ」具合が、とにかく印象に残っています。ロケ後の細かい追加取材などを行い、編集期間を経て、「ブラタモリ」秋田篇は11月9日と16日の二週にわたって放送されました。各回45分の番組でしたが、そこには半年にわたるスタッフの入念な仕事凝縮されていたんです。録画をお持ちの方、よろしければぜひ改めてご覧いただき、味わっていただけましたら幸いです。

「東京スリパチ学会」の皆川典久会長から、「某テレビ局が、秋田を取材したいそうなんだけど、連絡先を伝えてもいいか?」というメールをいただいたのは、2019年の4月でした。「『渋谷』の局ですか?」と返信したところ、「そう」。「ああ、それは喜んで!」……ここから怒濤の半年が始まりました。えー、唐突な書き出しで失礼いたしました。柳山努と申します。4年前の2017年に、30余年の東京生活を切り上げて秋田に戻り、フリーランスの編集者・ライターとして活動して……いるつもりなのですが、本業の傍ら主催している「秋田スリパチ学会」の会長としてご注目いただくことの方が多く、本欄にもそちらの立場で登場させていただくことになりました。錚々たる同窓の皆さまの前に、まったくもって僭越の極みですが、なにとぞご海容のほどお願い申し上げます。

「スリパチ学会」とは、「地形」に着目しながら街歩きを楽しむ集まりです。最初にできたのは「東京」でしたが、その後、日本各地に広がり、近年では、ローマやフィレンツェ、台北といった海外の街でも集まりが誕生しています。スリパチとは、「谷」の比喩です。もともとは、火山灰台地に由来する、東京特有の緩やかな谷地形を指していたのですが、語感のキャッチーさからか、全国の地理・地形・街歩き好きの皆さんによって、「谷」全般を指す言葉として頻用されるようになり、本格派の学者の皆さまの眉を顰めさせております（すみません）。とはいえこの「スリパチ地形」、着目しながら街を歩いていると、「なんでここにこの建物があるのか」だとか、「なんでここであんな事件が起こったのか」といった謎が、するすると解けてくるんです。昔からその街に住んでいる方から、様々な分野の専門家まで、多種多様な方が緩く集まり、それぞれが「知っていること」を披露しながらわいわい歩いて街の謎解きを楽しんでいるのが「スリパチ学会」です。さて、東京スリパチ学会の皆川会長は、NHKの人気番組『ブラタモリ』の放送開始当時からブレインでもあり

まして、同番組が全国を取り上げるようになってから、各地のスリパチ学会も取材のお手伝いをしていきます。冒頭の「ブラタモリ」が秋田を取り上げるか